

---

# Life of Vampire

鎧籠玲志

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Life of Vampire

### 【NZコード】

N7964C

### 【作者名】

鎧籠玲志

### 【あらすじ】

生まれたばかりに両親を失い、本当の血の飲み方がわからないヴァンパイア。悲しく、孤独なヴァンパイア。そんなヴァンパイアの人生がある日、180度変わる。

## 第0話・序章

生まれたばかりの「ヴァンパイア」は、正しい血の飲み方を知らない。

「ヴァンパイア」の世界では、少しだけ頂戴するというのが正しい飲み方。

物心が付いた頃に、両親、もしくは血縁者に教えてもらい、修練の末に習得するのである。だが、彼は

彼は、とある建物の屋根にいた。

人々は寝静まり、「ゴク、ゴク、」という音だけが妙に響く午

前2時。

その音が鳴り止むと同時に、彼は叫んだ。

「つづつはあ！！！」

うめえ、やっぱうめえなあ！！綺麗な月夜に、新鮮な血。最高ー！

！」

彼は、そう言いながら抱えていた者を乱雑に置いた。

それは・・・人である。いや、血の気が完全に失せている死体だ。

「夜明けはまだまだだな。こんなに気分がいい日はいろいろ飛び回るしかない！！！」

「んー・・・ヒヤーッホーーーーーーーー！」

彼は生まれたばかりに身内をすべて失った、悲しい悲しい「ヴァンパイア」。

この話は、そんなヴァンパイアの話である。

## 第0話・序章（後書き）

あなたも、ヴァンパイアが住む世界に踏み入れましたね。では、彼のこれからの一生涯を、一緒に見ていきましょう。

ただし・・・彼には見つかってはいけませんよ。

彼に見つかれば・・・あなたの血は、一滴も残りませんから・・・。

ホラーではありません。

## 第1話・黒羽藍

「ん・・・ふあーーーーー。よく寝たなあ。腹減ったし、今日も狩りに行くかあ。

久々に獲れないかなーーーーー。最近は失敗ばっかで、木の実ばっかりだし・・・俺はベジタリアンじゃねえつつの。」

木の上で愚痴つている彼の名は、黒羽藍。くろばねあい。

女のような名前だが、15歳の男。

実はこの男、生まれたばかりに、両親や祖父、祖母、その他血縁者を皆、田の前で殺されている。

時は冬。午後10時。空には月と星が綺麗に主張しあっている、素敵な夜。

藍は、そばに置いているいくつかのビンを腰にぶら下げながら言った。

「ああ。もう、1ビンしかないや。

狩りが終わつたら血も採りにいかなきや。」

血が2／3ほど入つている、ビール瓶ぐらいの大きさの透明なビン。藍はそれを一気に飲み干した。

飲み干した。なぜ血を？  
・・・だって、ヴァンパイアだもん。

「ふー・・・よっしゃ。行くか。

でも、瓶詰めの血じゅまいいち氣合が・・・  
新鮮な血の、じゅ、体にびびびとくる感じないし・・・  
まあ、寝起きだし我慢しよう。

狩りが終われば・・・パーティーだ・・・!」

訳の分からぬことを言いながら、藍は狩りの用意をすすむ。用意と言つても、ナイフを腰に差しただけだが。

そして腰を左右にねじったり、準備体操のよつたものを始めた。それが終わると、すーーっと大きく一息吸い・・・息を止める。

・・・シコツツ、、、

そんな音がしたと思えば、その場には、落ち葉が舞つてゐるだけであつた。

## 第2話・狩り

ガサ、、ギヤー、ギヤー、、、バサバサ、、、

とある山奥の森に、藍はいた。木々に覆われた、真っ暗な闇の中。なぜか目を瞑つて、じつとしている。・・・獲物の気配を探つているのだ。

「いた・・・・次は逃がさない！・！」

そう静かに言い、サツッと走り出す。  
素早く、だけどそつと。

だんだんと獲物に近づいてきた。どうやら、川で水を飲む鹿らしい。近づくにつれ速度を落とし・・・攻撃できるまであと少しのところで、一度止まり、隙をうかがう。  
ここまで来ると、ほんの少しの音さえ許されない・・・。  
そして。

「ああああ！・！」

藍は全力で目の前の鹿に向かって茂みから飛び出し、ナイフを振るう！・！

・・・ナイフは宙を切り、鹿は逃げた。

藍はガクッと崩れ落ち、嘆いた。

「う、、うう・・・。今度こそやつたと思ったのに・・・。

もつ見つかんねえよー・・・。

・・・・・・・ん？？・・・え？？

藍は目を疑つた。そして、少しの間が空いた後、

「え・・・・・ええええ！？！？！」

藍の目の前、川の向こう側に・・・罠にかかつた先ほどの鹿。なんと、驚いた鹿は、山の麓ふもとに住む人間が仕掛けっていた罠に掛かっていたのである。

なんという幸運。藍は大喜びで鹿を罠からはずし、捕まえた。

・・・忍び寄る影にも気付かず。

「はつ、はつはつは！？！俺に掛かれば、狩りなんてこんなもんだ！」

全く、俺つてば頭いいんだからあー！！  
あつはつはつはつ・・・

「たなぼたのくせして、よく言つ。ヴァンパイアの恥だ。」

### 第3話・出会い

「誰だー!?」

藍は、後ろの人物に言った。

「お前と同族だ。唯一の仲間、どうもあうか。」

「は? 同族? 唯一の仲間? ?

・・・てことは、あんたヴァンパイアー! ?」

「ああ、その通りだ。ずっとお前を探していた。ついてこい。」

そのヴァンパイアは、一方的に藍をどこかへ連れて行こうとした。

「あ、うん。

・・・って、ばか!」

ノリツッ ノミ・・・へたくそである。

「なんで名前も知らない奴についていかなくちゃいけないんだよ。俺は今からこの鹿を、俺が捕ったこの鹿を……食うんだから、邪魔しないでくれよ。」

「最近、この街の人間の血を飲んでるのはお前だろ? ?  
人間はその事で酷く怒り、怯えている。」

「そんなの関係ないだろ? ? 人間なんて、ヴァンパイアにとつてはただの餌じゃないか!」

「…してそんなに餌の事を気にするんだ？」

・・・あ、自分の餌を取るなって言いたい、」

「本当のヴァンパイアの世界、生き方。今のヴァンパイアがどうなつているか。すべて教えてやる。黙つてついてこい。もしこないなら・・・ここでお前を殺す。」

本当のヴァンパイアの世界。生き方。藍にとつて、魅力的な言葉だつた。藍には、そういうことを教えてくれる人がいなかつた。

ただ、幼い頃から血を飲むところを見つかる度、「ヴァンパイアだ」と言われた。

藍が自分をヴァンパイアだと自覚したのは、ただそれだけの事。だから・・・藍には、それを教えてくれるという事が、すごく魅力的だつたのだ。

「わかつた。」

## 第4話・ヴァンパイア

藍は、名も知らぬヴァンパイアに招かれ、その者の家であるつ場所に居た。

と言つても、こつこつ話にありがちな、墓場や地下や場違いな豪邸なんかではない。

街のはずれにある、ただただ普通の一軒家だ。

「まあ、適当にくつろいでくれ。

そして、真剣に聞いてくれ。」

「待てよ待てよ、……それそろ名前ぐらい教えてくれないか？」

もつともである。

藍は、この男に出会い、そしてこの家に着くまで、名前すらも教えてもらつてなかつた。

無用心にもほどがある。

「ん・・・それもそうだな。すまない。

俺は、緋涙ひるいあや 赤夜だ。なんども呼んでくれて構わん。」

「あやつて・・・俺より女っぽいじゃないか・・・。」

赤夜は、藍を睨みながら言つた。

「・・・以後、女っぽいは禁句だ。」

「や、、そんなに睨むなよ・・・。

俺は藍。黒羽藍だ。」

「お前の名は知ってる。なんてつたって、お前は俺を除けば唯一の生き残りなんだ。」

赤夜は、溜め息混じりにそう言った。

「え・・・？」

「やはり知らなかつたか・・・。これから、すべてをお前に話す。なにかあつても、途中で口は出さな。質問は後だ。わかつたか？」

「わ、、わかつた。」

藍は、一方的な赤夜に若干の嫌悪感を抱きながらも、頷いた。

「ヴァンパイアは・・・約3年前に、俺とお前以外が滅んだ。なぜだか分かるか？」

「・・・。」

「我々は昔から、人間とは真逆の闇の世界。夜の世界で生きてきた。だから、人間と出会つてしまふことなど滅多に無かつた。だが30年ほど前から、人間は我々の生きる世界に。我々が活動する時間にも姿を現すようになつた。

そして、我々の血を吸う場面が幾度と無く目撃されるようになり・・・後に、ヴァンパイアハンターと名乗る人間が姿を現し始めたのだ。」

「

「ヴァンパイアハンター・・・？」

「ヴァンパイアハンターは、我々を片つ端から殺した。そして、最終的に・・・俺とお前が残つた。これが、今のヴァンパイアだ。分からぬ」と、あるか？」

「待てよ。なんで返り討ちにしてやらなかつたんだよ？所詮、人間だろう？」

あんな奴ら、

「藍。我々、ヴァンパイアが一番恐れるものは何か・・・分かるか？」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7964c/>

Life of Vampire

2010年10月10日18時12分発行